

中山修一著作集 18

三つの巴
——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子

はじめに——著作集 18 の公開に際して

私は、著作集 9『デザイン史学の再構築の現場』の第六部「伝記書法を問う——ウィリアム・モリス、富本一枝、高群逸枝を事例として」のなかの第三編「伝記書法論（3）——高群逸枝の伝記作家はその夫をどう描いたか」の「おわりに」におきまして、次のように書きました。

ところで、以上のような本稿における考察を踏まえて、一種、義憤という力に後押しされて、私はこれから著作集 18『三つの巴——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子』を執筆しようとしています。ここに、予告として書き記します。

まさしく私は、そこに書き記しました予告のとおり、義憤という力に後押しされて、いまこれから著作集 18『三つの巴——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子』を執筆しようとしています。義憤の内容は、繰り返しませんので、必要に応じて、第三編「伝記書法論（3）——高群逸枝の伝記作家はその夫をどう描いたか」のなかの本論をご参照いただければ幸いです。

さて、ここに公開する著作集 18『三つの巴——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子』は、いわば著作集 14『外輪山春雷秋月』に所収の「火の国の女たち——高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子が織りなす青鞨の女たちとの友愛」の延長線上に位置するものです。このなかで私は、高群逸枝、橋本憲三、石牟礼道子の三者が、分かťことのできない三つの巴となって存在していたことを知りました。逸枝と憲三は、正式の夫婦です。女性史学を打ち立てるために、「森の家」と呼ばれる自宅に逸枝は隠棲し、憲三は編集者として妻の執筆活動を支えます。道子は水俣の洪水文庫で偶然にも逸枝の『女性の歴史』（上巻）に出会い、強い衝撃を受けます。逸枝の死後のことになりますが、道子は、自らの生を蘇らせるために、残務整理をする憲三に導かれて「森の家」で一時期を過ごすことになり、そこで、自身の後半生を契るのです。そのとき、道子にとって逸枝は自分を産み落とした「妣」となり、憲三は「最後の人」となるのです。

私は、高群逸枝、橋本憲三、石牟礼道子を別々に切り離すことなく、三つの巴という観点に立って、その連続する生涯を描こうと思いました。逸枝には、憲三が編集した全一〇巻からなる『高群逸枝全集』があり、その第一〇巻が「火の国の女の日記」と題された自叙伝となっています。前半部分を逸枝が書き、逸枝の死去に伴い、後半部分は憲三の筆にゆだねられました。他方、道子には、全一七巻からなる『石牟礼道子全集』があり、その別巻が、「葭の渚」という題名の自伝となっています。したがって、それらを丁寧に読めば、十分にそれぞれの人となりを理解することができるのかもしれませんが、しかし他方で、これまでの経験から、必要な部分を拾い読みするだけでは、なかなかその人の生きた内面には到達できず、自分が文字にしてはじめてその人物の思いの一端が手に入ることを承知していました。つまり、「読んで知る」だけでなく「書いて覚える」ことに、何らかの意味を見出していたのです。そのため、これから私の書く文は「写経」ならぬ「写伝」になるかもしれません。それでも、文筆家の末端に葉隠れする私にとって、この三人について「書き学ぶ」ためには、

結果的に書き写しの「写伝」になろうとも、それが必要なのです。

私はこれまでウィリアム・モリスとジェイン・モリスの夫婦、そして富本憲吉と富本一枝の夫婦を取り上げで伝記を書いてきました。そして今回は、本稿において、三組目の夫婦として高群逸枝と橋本憲三を、そして、その後続く橋本憲三と石牟礼道子の関係を取り上げ、そこに焦点をあてます。執筆をとおして、この三つ巴の内面に隠された、近代の新しい男女が織りなす愛と孤独の実相に直接触れてみたいと思います。そこには、モリスとジェイン、憲吉と一枝とはおそらく異なる、別次元の夫婦像が現われることになるでしょう。いまから楽しみにしているところです。

二〇二四年四月二四日

陽春のいま、南阿蘇の森のなかの寓居にて
中山修一

著者について

中山修一（なかやま・しゅういち）

1948年12月、熊本市に生まれる。熊本県立熊本高等学校時代は、新聞部にて部活を楽しむ。東京教育大学農学部林学科に入学、木材工学を専攻する。学生運動の影響でほとんど授業は行なわれず、ヨット部に所属し館山と葉山で年間一〇〇日以上の中泊生活を送る。卒業に引き続き、東京教育大学大学院教育学研究科修士課程において美術学（工芸・工業デザイン）を専修する。その後、東京教育大学は移転し筑波大学となる。

1974年4月に神戸大学教育学部の助手に採用される。それ以降、講師、助教授、教授へ昇格。主としてプロダクト・デザインの実技とデザイン史の講義を担当する。組織としての教育学部は、職を得てしばらくしたのち発達科学部に改組され、さらに現在は、国際文化学部との合併により、国際人間科学部へと改称。

在職中、学内にあっては、神戸大学附属図書館副館長を務め、学外にあっては、大阪教育大学教育学部、長崎大学教育学部、国立高岡短期大学（現在の富山大学芸術文化学部）、および静岡文化芸術大学デザイン学部等で、非常勤講師として「デザイン史」の集中講義に長年従事する。また、海外においては、1995年に、ロンドンのウィリアム・モリス協会が本部を置く〈ケルムスコット・ハウス〉にて招待講演を行ない、さらに2010年には、上海の華東理工大学美術・デザイン・メディア学部に招かれて二日間の連続講演を行なう。

他方、1987-88年にブリティッシュ・カウンシル（British Council）のフェローとして、続いて1995-96年に文部省（現在の文部科学省）の長期在外研究員として渡英し、主として王立美術大学（Royal College of Art）とヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（Victoria and Albert Museum）を利用して英国デザインの歴史研究に当たる。

1987年から2013年まで英国のデザイン史学会（Design History Society）の会員。2003-14年、ブライトン大学客員教授（Visiting Professor at the University of Brighton）。また、2008年に学術雑誌 *The Journal of Modern Craft*（Berg Publishers, Oxford）が創刊されたおりには、国際諮問委員会（International Advisory Board）の委員を務める。

2013年3月に定年により神戸大学を退職し、それ以降、阿蘇山中の庵に蟄居し、執筆活動に専念する。専門はデザイン史学。

現在、神戸大学名誉教授、博士（学術）。英国にあっては、王立芸術協会（Royal Society of Arts）の終身会員（Life Fellow）、およびウィリアム・モリス協会（William Morris Society）の終身会員（Life Member）。

訳書（共訳を含む）に、ノエル・キャリントン『英国のインダストリアル・デザイン』（晶文社、1983年）、ハワード・ヒバード『ミケランジェロ』（法政大学出版局、1986年）、ステュアート・マクドナルド『美術教育の歴史と哲学』（玉川大学出版部、1990年）、アヴリル・ブレイク編『デザイン論——ミッシャ・ブラックの世界』（法政大学出版局、1992年）、ジャン・マーシュ『ウィリアム・モリスの妻と娘』（晶文社、1993年）、およびポール・グリーンハルジュ編『デザインのモダニズム』（鹿島出版会、1997年）。